

仏師院什作 山口・正護寺釈迦三尊像について

末吉 武史（福岡市博物館）

山口市陶にある萬松山正護寺は、南北朝時代の延文年間（1356～1361）に大内氏重臣の陶弘政を開基、傑山寂雄を開山として創建された臨濟宗東福寺派の寺院である。本発表では同寺本尊として伝来した釈迦如来及び両脇侍像を取り上げる。

中尊は髻を結び上げて豪華な宝冠を戴き禅定印を結ぶ宝冠釈迦如来像で、その図像は中国・宋～元代に『華嚴経』の教主毘盧遮那如来の影響を受けて成立し、日本では鎌倉時代以降、禅宗寺院でしばしば造像されたものである。像高 85.2 cm、ヒノキ材の寄木造で玉眼を嵌入し、表面は金泥に精緻な截金と盛上げ彩色を駆使した皆金色仕上げとし、銅製鍍金の豪華な宝冠と胸飾が付属している。両脇侍は獅子（亡失）と象に騎乗する文殊・普賢菩薩で、中尊と同工であり、当初から一具の作と認められる。

三尊とも箱を思わせるやや角張った体軀で、厚手の衣に複雑にうねる衣褶、眉を長く引いた沈んだ顔立ちをあらわし、像内を平滑に内割りしたうえ像心東と前後の体幹部材を繋ぐ二本の束を設ける構造を採用している。こうした特徴は足利将軍家の菩提寺である京都・等持院の大仏師職に任じられた仏師院吉とその嫡子院広らが確立し、南北朝～室町時代の仏像様式の主流となった院派様式に通じるものである。また、その出来栄も院吉・院広の代表作である観応 3 年（1352）銘静岡・方広寺釈迦三尊像に匹敵する水準にあり、膨らみの強い頬や着衣の処理などに微妙な作風の違いが認められるとはいえ、制作時期も方広寺像とさほど隔たらないように見受けられる。

ところで、本三尊像は既に『山口市史』史料編に紹介され、南北朝時代の院派仏師による作品と評価されていたが、これまで造像銘記等は報告されていなかった。しかし、近年発表者が改めて精査を行ったところ、像底裳先部に「仏師法印院什作」と記す陰刻銘が見出され、仏師院什が制作したことが明らかとなった。

院什については、正平 17 年（1362）の福岡・崇福寺（周防永興寺旧蔵）釈迦三尊像や応安 7 年（1374）の山口・龍文寺（周防長福寺旧蔵）釈迦如来像など数件の作例があり、大内氏関係の造像など西国を中心に活動していたことが知られる。また、仏師としての系譜についても、正平 25 年（1370）銘の熊本・東禅寺釈迦三尊像には「仏師院吉嫡孫院什嫡子院■（一字不明）」と記されることから院什が院吉の子で、さらに法印位の補任時期から院広と並ぶ重要な立場の仏師であった可能性も指摘されている。

本発表では本三尊像の概要を紹介するとともに、既に知られている関連作品との作風比較を通じて院什の個性を明らかにし、彫刻史的な位置づけをおこなう。さらに、大内氏や陶氏といった有力外護者の存在にも注目し、周防・長門地域におけるその後の中世院派仏師の活動について、現存作例を押さえながら地域的な展開を跡付けたい。